年頭の御挨拶

新年あけましておめでとうございます。

辰巳会も発足以来二十五年目の新しい年を迎えますことは会員の皆様と共に私の喜びとするところであります。

さて、この二十五年の間世の中はハイスピードで技術革新を重ねております。なかでもトランジスタからＩＣ、ＬＳＩ、そして超ＬＳＩといった半導体分野の発達は驚異的であります。まさに、「重、厚、長、大」から「軽、薄、短、小」への進化の波が打ち寄せて来ております。この様なニューメディアの時代となりましても我々の生活にはまだ〳〵すぐには影響があるとも思えません。

会員の皆様方も健康には呉々も留意され此の難しい世の中を乗り切る様頑張って下さい。

辰巳会は本年で創立二十五周年を迎え、記念大会外各種の事業を行いたいと考えております。

会員の皆様方は奮って御参加戴きたいと思っております。

最後に会員の皆様方の益々のご健勝を念願し年頭の挨拶といたします。

昭和六十年　元旦

辰巳会々長　鈴木治雄

私の履歴書

三社合弁構想

豊田英二
（トヨタ自動車会長）

日産・フォードと密約

日米関係悪化で自然消滅

（日経新聞Ｓ59・10・2）

話は前後するが、昭和十四年の春におやじのすすめで見合いをした。その日は確か四月一日のエープリルフールだったが、半年後の十月十九日に結婚式を挙げた。妻の名前は寿子（かずこ）と言い、大正九年の生まれだから、七つ違いということになる。

私が小学校五年生のとき名古屋でラジオ放送が始まり、自分で作った受信機を耳に当てながら聞いていたころ、家内は何かの番組に出演したというから、多少の因縁はあったわけだ。

家内のおやじは高橋半助と言って、神戸にあった鈴木商店の番頭をしていた。家内は半助の長女である。鈴木商店は金子直吉さんが「三井、三菱に追いつき、追い越せ」とばかりに、一時猛烈な発展を遂げたが、昭和二年の金融恐慌でつぶれてしまった。つぶれたころ半助は名古屋の支店長をしており、そのまま名古屋に居すわり、自分で商売を始めた。

見合いから結婚までは、休みの日は向こうの家によく遊びに行ったが、今でいう二人だけのデートはあまりしなかったと思う。外に出たのは夏に富士登山したぐらいだ。これも二人で行ったわけではない。家内と弟といとこと私の四人で登った。

トヨタにはまだ夏休みという制度はなかったから、土曜日の仕事を終えてから晩に汽車に乗り、翌日の朝から登り始め、昼過ぎに頂上へ着き、ひと休みした後、下山し、夕方の汽車に乗って帰るという強行軍だ。むろん月曜日は平常通り、朝七時に会社へ出た。

新婚旅行は九州だった。神戸から船に乗り、瀬戸内海を通って別府まで行き、そこを根城に阿蘇や耶馬渓を回った。その辺は大学の時に行ったことがあるので、私が案内役だ。帰りも船で帰ってきたが、家内は最初の晩に船酔いしたものの、その後は平穏な航海であった。

結婚すればそれなりの家が必要ということで、おやじが挙母工場近くの豊栄町に土地を買い、家を建ててくれた。家は結婚直後に出来上がり、新婚時代はそこから歩いて会社に通った。その家は現在長男の幹司郎が住んでいる。会社までの間は松林が続き、秋ともなれば松たけが生え、朝それを見つけては草でおおい隠しておいて、帰りにそれを持ち帰ったものである。

会社の方では、私の結婚の前後にややこしい問題が持ち上がっていた。内外メーカーとの提携である。トヨタと日産自動車、それにフォードの三社が提携して、合弁会社をつくろうという話である。この三社提携について、喜一郎から一度も聞いたことはなく、真相が分からなかったが、最近、証拠物件が出てきた。

ことしの春、あるパーティーで日本フォードの社長に会った際、「ウチの金庫を掃除したところ、こんなものが出てきた。トヨタの方にもあるか」というから「ない」と答えたら、古証文のコピーを送ってくれた。

古証文というのは三社提携のアグリーメントだ。それによると、トヨタと日産がそれぞれ三〇％、フォードが四〇％を出資して、日本に合弁会社を設立するというものだった。これには日産は鮎川義介会長、トヨタは当時の社長の豊田利三郎、フォードは日本フォードのコップという人がサインしている。日付は昭和十四年十二月十九日とあった。

喜一郎がこの三社合弁に賛成していたかどうかは疑問だが、証拠物件がある以上、相当詰めた話をしたのだろう。その年の七月に、喜一郎から「斎藤尚一君（元会長）と一緒に米国に行って勉強してこい」と言われた。あの時、なぜ喜一郎が米国行きを言い出したかは分からないが、ともかく三社合弁

と何らかの関連があったのではないか。

米国行きが本決まりになり、会社から支度金をもらい、洋服を何着も作り、船の予約もした。盛大な送別会もやってもらい、いざ出発というときに、突然中止になった。当時は外貨割り当てが問題になっており、軍あたりから横ヤリが入ったのではないか。

結局、食い逃げに終わった。支度金は洋服に化けてしまっており、返せない。

仲間に対しても送別会をやってもらった手前、体裁が悪かった。私の米国行きも中止になったが、トヨタ、日産、フォードの三社合弁構想も、日米関係の雲行きがあやしくなるにつれ、自然消滅してしまった。

鈴木商店と我が故郷

大里（ダイリ）の回顧

北野浅美

私は北九州市門司区大里（現在門司駅のある所）の海岸近くの生れで前方は急流渦巻く関門海峡です。叔父達が帝国炭業と帝国汽船に勤務知人も鈴木商店街に数人勤めてゐました。その故かいつの間にか子供心にも鈴木商店・金子さんは云うまでもなく柳田さん西川さん高畑さんと云う名は覚えてゐました。

さて私の故郷大里、明治中期より鈴木商店が海岸線に沿い北より南へ即ち日本塩素、日本酒類・大里製粉（日粉）大里製糖（日糖）やや離れて帝国麦酒の各工場を設けました。地の利を狙っての彗眼でせう（私の生家は日糖の近くで現存してゐます）この小さな町の海岸に鈴木商店の大工場が五ツ竝んでゐるのも又珍らしいと言えます。

現在各工場は社名・系列は変れども盛業裡に社会や国家に貢献しております。

創業者鈴木商店は消えても、それ等の工場自体の歴史には必らず鈴木商店名が刻み込まれて生きてゐる筈です。同封の「門司工場が歩いた五〇年サッポロビール門司工場誌」を御覧下さい、鈴木商店がサクラビールがハッキリ生きております。

私、その鈴木商店系の工場群の間に生れ、その一つ帝国麦酒に大正十五年三月三十日入社（東京勤務）しました

翌昭和二年鈴木商店問題発生し新入社員は暫らく無く、結局鈴木系としては私共が最後でした。

昭和十八年十月当時の大日本麦酒に被合併解散・サクラビール最後のバランスシートを作ったのも何かの縁だったと思います。そして退社しました。在社十八年故郷のサクラビール・我が家から十分足らずで歩いてゆけるサクラビール、私の脳裡より消える筈はなく今も生きております。

「たつみ」第四十一号御恵送頂き鈴木商店の記事やサクラビールの名もあり、同志の内十一名も現在辰巳会員であり、同志便りも掲載されてゐますので懐しさ隠し負えず、我が故郷をサクラビールを回顧し始めての終りの駄文を弄した次第切に御寛恕を仰ぐ次第です

昭和五十九年十月二十日

◎原稿募集

内容　随想　短歌　俳句　絵画　詩　写真　鈴木往時の思出などを

必ず原稿用紙に縦書で

四百字詰五枚程度

締切　昭和六十年五月末日

送先　神戸市中央区京町七二　太陽鉱工㈱内「たつみ」編集部宛

日銀より鈴木商店に転ず

門室寿人（遺稿）

大正六年二月、高畑、永井、亀井三氏の同意津村先生の諒解を得て神戸鈴木商店に転ず。店内の空気は正に元気横溢にして陰気の日銀に比し昼夜の差あり。

七年前同時に卒業せし連中は皆主任級にして多くの部下を指図し収入亦何倍かにして得意満面也。我輩止むなく小さくなりて店内の模様の見学に努む。

免に角亀井君に関係深き鉱山部に籍を置き山師達と席を同じうすれども此の連中は買山のため一度出張するや山麓にて酒に浸り談判に幾日も費し足跡何処にありや。帰神する迄の行動全く不明。豪傑連揃にて其の長を阿部元松と云い一奇人也。菊池亦酒豪にして行動睥睨す不可。丸で無統制、無茶苦茶の天地也。併し事業勃興の際は如斯元気なくしては急速間に合わず或る点迄は大目に見るの外なけん。

▲ロンドン時代の筆者（大正７年頃）

四月に入り岡山県江興味鉱業所に出張を命ぜらる。岡山にて中国線に乗り換え福渡にて下車人力車にて旭川沿いに四里半上り渡し舟にて対岸に渡り更に瓜阪上り一里半にて高き山間の鉱山事務所に達す。神戸を朝早く出発夕方六時頃に到着全く不便の山狭にあり。

此の辺今尚寒冷、夜間は真冬同様也。之の鉱山は九洲人にして岡山在住山本と云う山師の名目にて買収し未だ鈴木の名義出しあらず。その財的看視が我輩に与えられたる任務也。初め二週間位の予定なりしが遂に九月末迄滞山此の間一度報告に帰神せし事あるのみ。

我輩にとりては本店にて不得要領るより全々新らしき鉱山生活研究は面白く半年の間に得たる感想経験苦難は後日の為益せる処多大なりき。当時日比に銅精練所を作りたるも鉱石は買鉱耳にて是非自家銅鉱を獲得し度きため各地に買山を試みたるも斯かる泥縄式にて果して成功するや疑無き不能。然れども銅価の暴騰は放棄したる選鉱済の鉱石亜選鉱しても計算に合うとて買山するに至る。

中国筋には大いなるもの無けれども小なるもの可なり多し。江興味も一時鉱石塊に出合いて前主は儲けたる由更に探鉱せば宜い脈に当る可しとて買収したるもの其後鉱区の拡張をなし大いに有望視られつゝある時「ロンドン」行きの交渉を受け下山充分鉱山研究を遂げ得ざりしも気分丈けは味い得たりと思う。

当時「ロンドン」への道は北米経由又は印度洋経由の外無くシベリアは途絶えあり。独の無制限潜航艇の梁跳せる危険海を犯しての赴任は両親妻子ある身の考うべき事なれども此の機を逸しては又欧米を視るの機無かるべく断然決行と決心す。日銀時代より一度欧米に行き度きものとの希望ありしも到底実現の期なし。一夜三等客となりて太平洋を渡りつゝある夢を見し事ありしが之が正夢となり然も一等客として渡洋正に夢心地せずんば非らず。

当時の江興味鉱山生活は全く原始的人間の堪え得る最低生活也。而して今進まんとする国の生活は最高位のものなり。奈落の底より九天の高きに飛躍快哉を叫ばざらんと欲するも能はざるなり。然かも得意は処するに困難大に警む可き処なり。

九月後任者に引継ぎ下山。先づ鼻の治療をなしそれより九州北部の鈴木関係工場を見学す。九月末大暴風あり。九州は平隠なりしが